

受動から自発へ「成長」するための「アカデミック・ジャパニーズ」

－1, 2年次学部留学生対象の日本語日本事情科目の実践より－

Academic Japanese for Developing Learners' "Initiative" in a Japanese and Japanese Studies
Course for 1st and 2nd Year University Students

木戸光子・西村よしみ・沖田弓子・杉浦千里・関裕子・柳田直美（筑波大学留学生センター）

KIDO Mitsuko, NISHIMURA Yoshimi, OKITA Yumiko, SUGIURA Chisato,
SEKI Yuko, YANAGIDA Naomi (University of Tsukuba)

要 旨

「アカデミック・ジャパニーズ」は、大学での学習・研究活動に必要な日本語力養成とされる。しかし近年、受動的な学習者が増える中で、その前提として学習者の「自発」を促す活動が必要なのではないかと考えるようになった。そうした視点から日本語日本事情5科目について分析をした。その結果、自己モニター、他者とのコミュニケーション、思考を深め世界を広げるなどのことが、「語学」の授業にあってもその学習を成功させるためには不可欠の条件であることが明らかとなった。

"Academic Japanese" has been thought to be developing Japanese skills for study and research at university. However, as learners tend to be more passive recently, stimulating learners' "initiative" is considered necessary. From this point of view, we analyzed five classes on the Japanese and Japanese Studies course. As a result it became clear that aspects such as self-monitoring, communication-skills, thinking more deeply, broadening one's world view are essential also for the language class.

【キーワード】 自発, 自己モニター, 他者とのコミュニケーション, 言語技術,
思考を深める, 世界を広げる

1. 問題提起

「アカデミック・ジャパニーズ」は大学の一般科目や専門科目の勉学に必要な日本語の言語技術を学ぶということで、レポートの書き方や講義の聴解、発表の仕方などが取り上げられる傾向がある（注1）。しかし、1, 2年次学部留学生の日本語日本事情科目を担当している立場において、大学での学術的な活動に必要な日本語力育成の前提として、自己認識や自己開示、自律学習など、一見必ずしも日本語力の向上に直接関係しないような、学習者の「自発」を促すということが実は重要なのではないだろうか考えるようになった。

そこで、本稿では、筑波大学の日本語科目の授業担当者が、受動的な学習になりがちな学習者に対して、日本語という「語学」の授業において自己認識や自己開示を促し、学習者の視野を広げ、思考を深めていくという授業実践について、「自発」をキーワードとして授業活動を分析し、報告する。このような学習者の自発を促す授業を通して、いわゆる「アカデミック・ジャパニーズ」を再考し、学習者の日本語力を高めると同時に自立した個人としての成長を促す日本語日本事情科目のあり方を検討することを目的とする。

2. 筑波大学日本語科目の概略

筑波大学では、日本語日本事情科目として外国人留学生および帰国学生対象（学類1, 2年次、学類は学部に対応）に年間計13科目開講している。本校の日本語日本事情シラバスでは「全体的な学習効果を高めるとともに、履修上の負担の軽減を図ることを目的に設けられている科目」と位置づけられている。そのうち日本語科目は5科目で、「日本語演習Ⅰ」「日本語演習Ⅱ」「日本語聴解」「日本語読解」「日本語作文」を75分授業10週で1~3学期開講している。

3. 日本語科目の位置づけと意義—学習者の「自発」を促し「世界を広げる」

「アカデミック・ジャパニーズ」は学術活動が目的の日本語力育成を目指す狭義には解釈される。大学での勉学のための日本語力だけでなく、大学生にふさわしい論理的思考力も備わっていることも必要である（図1）。

本稿の対象である日本語科目の受講者には、図1の右上に至らず、図1の左上の位置にいるような、日本語力がある程度あるにもかかわらず論理的思考力の十分でない学習者がよく見られる。高校まで受動的な学習態度や生活態度で過ごしてきた学習者が、大学でいきなり勉

学面でも生活面でも自立を求められることが日本語学習にも影響を及ぼしている。このような学習者が自ら学習し、的確な自己認識の下で自己の世界を広げるには、日本語力と論理的思考力の育成の前提として、まずは受動的な学習態度や生活態度を脱し、自ら好奇心を持って物事を考え探求して自らの世界を広げていく「自発」が重要である（図2）。

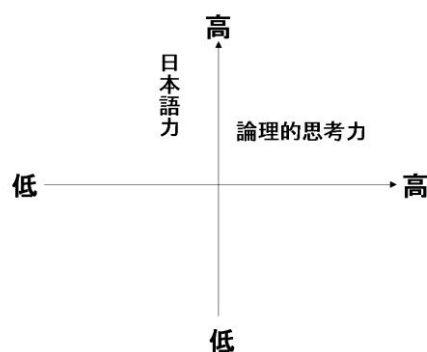


図1 【日本語力】【論理的思考力】の4分割

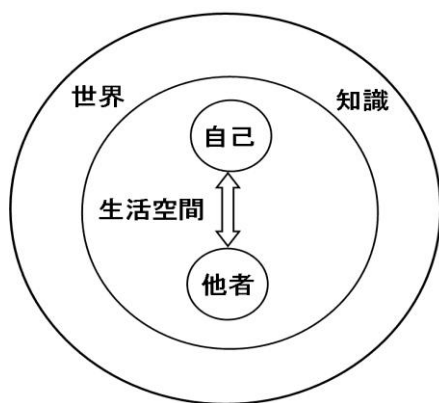


図2 受動から自発へ「世界を広げる」

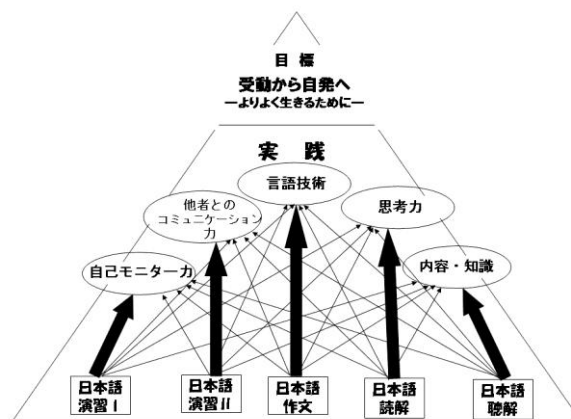


図3 日本語科目の目標

しかし、いったん身についた受動的態度は言葉で指摘されただけでは変えるのはかなり困難である。したがって、授業活動において受動的な学習者が自ら学習するようになるには、学習者の「自発」を促す何らかの具体的な仕掛けが必要になってくる。ここでは、「自発」を促すための授業活動において学習者にとって必要なものを、「自己モニター力」「他

者とのコミュニケーション力」「言語技術」「思考力」「内容・知識」の5つの要素に分けてみた(図3)。どの授業でもこれらの要素は扱われるが、各授業で重視する要素が異なる。

なお、本稿では授業での実践に基づいて授業活動を分析し、各授業で行ってきた活動にいくつかの共通項を見出して概念化するという帰納的な手法で授業分析を試みた。したがって、心理学や教育学の理論に基づいて、演繹的にトップダウンで目標を設定するのではなく、ボトムアップでそれぞれの授業のあり方を模索中である。

4. 日本語科目の特徴的な活動

以下、表1とともに日本語科目の各授業の目標や主な活動を紹介する。

4-1. 学習者の自発を促すための仕掛け 「日本語演習Ⅰ」

「日本語演習Ⅰ」では、異文化理解に関する文献を読み、それについてグループ発表と討論を行い、考えを深めることを目的として授業を行っているが、学習者の自発的な思考や日本語での表現がなされなければ授業は成立し得ない。そのため、学習者の自発を促すために授業にいくつかの「仕掛け」を施した。

(1) 授業と学習者を結ぶ

本授業は「授業内活動」「授業外活動」「内省」の3つの要素で構成されている。「授業内活動」では異文化理解についての文献講読とそれに関する発表・討論や、コミュニケーション能力を育成する活動などを行なう。「授業外活動」は毎回の宿題として、文献を講読して自分の意見をまとめておくことや日本人へのインタビューなどを課し、これを材料として授業を進める。つまり、宿題をやっとなければ授業に十全に参加することができないという仕掛けである。「内省」は、毎回授業終了時5分を使って、その日の自分を振り返り、「うまくできたこと・できなかったこと・感じたことや考えたこと」の3点を書くという作業である。授業直後の記憶の新しいうちに書く、つまり考えることで自分自身を把握することができるようになる。また、書き溜めたものを最終授業時に再度見直して「自身の変化について」「よい発表と討論について」レポートすることを最終課題とすることも仕掛けておく。

(2) 繰り返し行なう

インタビューやグループ発表など、1つの課題は2~3週にわたって繰り返し行なう。初回にうまくできなかったことを明確にして、その改善策を考え、翌週実施して、再度検討する。できないことを放置せず、それを粘り強く考え、繰り返すことで学習者に変化が生まれる。この検討をクラス全体ですることと、それを踏まえて「内省」の作業をすることが発表や討論の質を高めることにつながっていく。

(3) 他者を鏡として自己を振り返る

しかしながら、通常、クラスの人数は20名を越えるので、発表などを1人が「繰り返す」時間的余裕はない。そのため、学習者は持ち回りで「観察者」になり、他者が行なっていることを観察して意見を述べるという作業をする。この作業を通じて、発表や討論の面白さという「内容」だけでなく、それを支える発表の手順や、準備の有無、発表メンバーの協力体制、聞き手の態度といった「全体を見渡す視点」をも意識することができるようになる。

(4) 書くことで考えをまとめる

発表の際にキーワードを書く、レジュメをグループで検討して書く、観察者としてのコメントを書く、毎回の振り返りを書くというように学習者には多くの「書くこと」が要求される。一つの言葉、一つの文を書くためには自分の中の漠然としたイメージをまとめ上げてその一言を選ばなければならない。逆に考えを書き進めるうちに、もやもやとしていたものが形をとって立ち上がってくることもある。これを一人で、またグループで行なうことで考えを深めることができるので、本授業には多く「書く」ことも取り入れている。

以上述べたように、授業と学習者の現実を結ぶ仕掛けや、10週の授業を関連付ける仕掛けを施すことで、学習者は学習内容の理解と同時に自己モニターの力を伸ばすことができるようになる。それを使って、「自分は今、どこにいるのか、どこに向かっていくのか、そのためには何が必要なのか」ということを自発的に考え、実行できるようになることが期待される。

4-2. 自己拡大とコミュニケーション・スキル養成をねらいとした「日本語演習Ⅱ」

プレゼンテーションやディスカッションは、「自分のことを知ってほしい」、「相手のことを知りたい」、「上手に発表したい」などの自発的欲求がなければ、成功させることは難しい。「日本語演習Ⅱ」では、**知る**→**話す・聞く/つながる**→**観察する**→**ふりかえる**という4つのステップで、学習者の自発を促す試みを行った。

以下、授業のサイクルにそって、自己の拡大、コミュニケーション・スキルの向上のねらいについて述べる。下の図4は授業のサイクルを表している。

(1) 自分を知る

他者とのコミュニケーションの前に、まず、話す材料がなくてはならない。本授業では、毎回、自分の専攻分野について調べるという課題を出した。この課題は、入学したばかりでまだ自身や自分の専攻について漠然とした知識しかない学習者に、自分の専攻や自分が将来勉強したいことを考えさせ、自己の拡大をはかる機会を与えることをねらったものである。このことは現在、日本人大学生の初年次教育で取り入れられているキャリアデザインの考え方をもとにしている。大学入学時に自己を知ること、近々の将来について考えることは、授業内だけでなく、大学での学習・研究活動に対する自発を促すことにもなると考える。一方、コミュニケーション・スキルの向上のためには、授業で発表することを想定して、聴衆の理解の助けになるようなレジュメを作成させた。

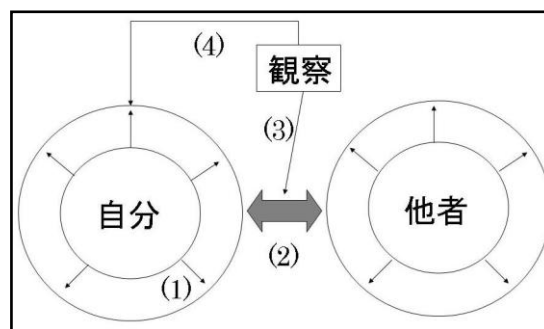


図4 授業のサイクル

このことは現在、日本人大学生の初年次教育で取り入れられているキャリアデザインの考え方をもとにしている。大学入学時に自己を知ること、近々の将来について考えることは、授業内だけでなく、大学での学習・研究活動に対する自発を促すことにもなると考える。一方、コミュニケーション・スキルの向上のためには、授業で発表することを想定して、聴衆の理解の助けになるようなレジュメを作成させた。

(2) 自分を話し、他者を聞く/自分と他者のつながりを考える

授業では、調べてきたことを発表する。発表は、グループ発表を行った後、全体発表をするという手順を踏み、全員に話す機会、聞く機会を与えた。ここでは、話すことによる自分の知識の整理、聞くことによる他者との知識共有によって、さらなる自己の拡大をはかった。さらに、他者と自己とのつながりを考えることで、他者の専攻分野への知的欲求

が高まり、自発を促す効果もある。一方、コミュニケーション・スキルの向上のためには、聴衆を意識した分かりやすい話し方、聞くときの態度を意識させた。

(3) 観察する／(4) 自分をふりかえる

グループ発表後の全体発表では、発表者、聴衆、司会者の他に、「観察者」という役割を設けた。「観察者」は、発表とディスカッション全体を観察し、おもにコミュニケーション・スキルを中心に観察する。観察者は、発表やディスカッションの内容部分とは切り離されることによって、発表やディスカッションのいい点、改善した方がいい点を客観的に分析することができる。この活動によって、「あの人のいい部分をまねしたい」、「あの人のように発表したい」というコミュニケーション・スキルに対する自発を促すことができる。

以上、授業のサイクルにそって、学習者の自発を促す方法について述べてきた。(1)、(2)の活動は自己の拡大に、(3)、(4)の活動は主にコミュニケーション・スキルの向上に重点を置いている。このように、重点の異なる活動を組み合わせることによって、「日本語演習Ⅱ」がねらいとしている大学における学習・研究活動に対する学習者の自発を促すことができると考える。

4-3. 書き換えとグループでの内省を通して言語技術を自ら学ぶ「日本語作文」

作文の授業ではレポート作成の言語技術について書き換え練習を中心にして学ぶことが主な内容である。大学生として考えを深めるテーマをレポートに取り上げ、学習者同士の推敲など、グループ学習を通して学習者の自発を促して学び合う授業を試みた。授業ではテレビのドキュメンタリー番組の内容と関連づけて、授業前半は引用や要約などの言語技術の学習をしながら事実中心のレポート作成、後半はドキュメンタリー番組で紹介された人々の仕事への取り組みをまとめながら意見を述べるという意見中心のレポート作成を行った。

(1) グループで内省する

事実中心の中間レポートでは「デジタルネイティブ」(2008年11月10日NHK総合テレビ)という未来志向の内容のドキュメンタリー番組を取り上げ、視野を広げ、思考力を高めることを目標に、理解・表現・思考をつなぐ活動として「書き換える」ことを重視した。言語技術「引用する」「要約する」「簡潔にまとめる」「事実を書く」「意見を書く」「全体構成を整える」について、作文を書く過程でグループ学習によりお互いの作文の問題点を相互に指摘し合った。引用した内容や表現、文章構成の意識化をグループで内省し、その結果を踏まえて書き換えた。

また、意見中心の期末レポート「10年後の自分に必要な仕事のスキルは何か」では表現・内容・思考を深化させるために序論、本論、結論の各段階においてグループで推敲をした。グループでの推敲ではワークシートをあらかじめ用意し、よりよいレポートにするための構成や表現の注意点がわかるようにして、学習者がお互いにモニタリングしやすくした。

(2) 文章のジャンル差を意識化する

レポートに引用するものを文献ではなく、あえてレポートとは文体も表現も異なるテレビ番組にしてみた。これは文章のジャンル間の共通点と相違点をレポート作成練習に活用することができるからである。取り上げた番組では、話し言葉・敬体などレポートの表現とは異なる表現や文体が用いられている。一方、この番組の冒頭の説明部分は、レポート

の序論と同じく「背景説明」「問題提起」「内容予告」という構成になっている。このように、異なった文章ジャンルのものでも同じ構成として共通点がある一方、差異があるからこそ逆にジャンルの相違による文体・表現の意識化が学習者にはしやすいという利点がある。

(3) 内容を再構築する

理解した内容の再構築として「書き換える」ことを重視した。①取捨選択した内容を「引用する」「要約する」「簡潔にまとめる」、②例示や定義などの形で文章の中に組み入れることにより文章全体の論理展開と関連づける(注2)、③書く内容に適した全体構成に整える、という3段階の学習を行った。以前は、引用の表現や引用と剽窃の違いなどを説明しただけで作文を書くようにしていた。しかし、大学入学直後の留学生は大学のレポート作成に必要な文法や語彙などが不十分な者もいるので、表現を覚えて使用できる表現を増やすことも重要である。そこで、読んだり聞いたりした日本語の表現を踏まえてその内容を自分で再構築する方法として書き換え練習を行ってみた。書き換えることにより、その後の引用練習、要約練習は教師の支援がなくても比較的スムーズに行えるようになった。

以上、この授業では学習者の自発を促すために、教師主導で行ってきたこれまでの授業とは異なる観点から、授業を構成する内容や役割などのいわば変数を変えてみた。教師による添削ではなく学習者同士のモニタリングを行なうことや、文章ジャンルがレポートとは異なるテレビ番組の内容を書き換える・引用することが変数を変えることにあたる。このような変更を行うことにより、学習者の自発を促す要因を授業に盛り込んだのである。

4-4. 自己と「世界」の関係を構築する「日本語読解」

「日本語読解」の授業では、文型・表現・語彙などの基本的知識を確認した上で、自己と「世界」の関係を「読解」という行為を通じ考察し、深めることを目標としている。そのための素材として、導入時期には日本の若者をテーマにした新聞のコラム、投書欄、統計資料など、自己を投影させやすいものから始め、徐々に「世界」へと視点を広げていく素材を選んでいる。ここでいう「世界」とは、自己を中心に広がる「モノ、コト、ヒト、トキ、シゼン」を含む広い概念である。

本授業では「学ぶ」こと、「教える」ことについて以下のように捉えている。まず、「学ぶ」とは、「状況に埋め込まれた」学習者自らが社会に働きかけ、社会的相互作用、関係性を通じて知識を構成していくことと考えている。その際、教師(先輩)の役割は、学習者が知識を構築していくための「足場」を作り、学習者と教師、学習者同士との語り合いという相互作用を通じ、新たな知識や概念の理解へ導く役割を果たすものとする。

従って、学部1,2年生を対象とした本授業では、上述の授業観に基づき「読む」ことを通じて「自己と世界の関係」の構築もしくは、再構築が最終的な目標である。

(1) 「関係を構築する」ための学習プロセス

授業の流れは1トピック2コマ構成で進め、1コマ目は、書かれた情報を正確に「読み解く」ことを目標に、①語彙・表現の理解②音読、黙読③口頭での要約などで基本的な内容を確認する。同時に、教師は語彙・表現の背景にある社会的文化的情報を提供する。次の2コマ目には「考え・感じ・想像する」ということを目標に、グループワーク→まとめ

→発表という活動と宿題の発表などを行う。2コマ目の具体例を挙げる。「不幸に甘える若者たち」(横田由美子:MSN産経ニュース2009年2月15日)というコラムには、グローバル化した金融危機の中、非正規雇用者の解雇、大卒の就職内定切りの問題、日本の概念の「甘え」など豊富な題材がある。そして授業では、それらの題材について以下の5つのプロセスに従い活動を行う。

- 1) 自分を取り巻く「世界」はどのようになっているのか考える。
- 2) 自分はどうか「考え・感じ・想像する」のか。
- 3) 立場を変えて読む。
- 4) 批判的に読む。
- 5) 自分と「世界」はどのように関わり、関係しているのか考える。

更に、宿題としてそれらの題材から自分の「問い」を作り、図書館、インターネット等で調べて発表し、レポートをまとめるという課題を出すこともある。

(2) 授業をデザインするプロセス

「足場」を作るためには、授業のデザインが必要となる。その参考にしているのが、吉崎静夫(2008)の5つの授業デザイン法である。①授業に対する思い②発想力③構成力④授業で用いる教材の開発。そして、それぞれのプロセスを背後から支えている⑤問題意識という一連の流れを念頭に授業をデザインするものである。まず、本授業に参加する学習者たちに対する⑤の問題意識についてであるが、「もっと自分と世界を知ってほしい」「受け身から自発的に世界に働きかける方法は」「深い読みはどうしたら可能なのか」などの問題点があった。②の発想力については、それらの問題点を授業の中で「「考え・感じ・想像する」ためにどうしたらいいのか」また、そのための「足場」をどのように作ったらいいのかを考えた。さらに、③の構成力では、①と②を具体化させることを目指し、自己モニター力、複眼的・批判的な思考を育てるために上述の5つのプロセスを考え構成し、④教材開発という一連の流れを念頭に授業をデザインしている。

以上、教師の授業観を背景に、「考え・感じ・想像する」力を伸ばしながら、「自己と世界の関係を構築する」読解授業を試みてきた。試行錯誤の授業ではあるが、学習者から「日本に興味を持つようになった」「自分と自分の国の良さを認められるようになった」というフィードバックがあったことは、彼らと世界の関係構築の一助にはなっていると考える。

4-5. 世界知識の拡大を目標とした「日本語聴解」

本授業では、ノート・テイキング、ディスカッション、発表、論説文作成など総合的なアカデミック・スキルの向上とともに、世界知識の拡大を目標の大きな柱に据えている(沖田2009)。この目標は、学習者の大学での活動だけでなく卒業後までも視野に入れている。

世界知識の拡大とは、生きるため、よりよく生きるために必要な実世界についての知識を得ること、さらに、世界を正確に読み解き、世界を変える行動につながる「『構造化された』知識」＝「教養」を身につけることである。

(1) 世界について当事者性を持つ

本授業では「自発」について次のように考えている。自発とは、問題について世界について当事者性を持つことである。当事者性とは文字通り、自身がその問題・事象の当事者であることを認識するということである。問題・事象を「私^{わたくし}の問題」として捉えるということである。

この当事者性を持つということを実現するために、本授業では「内容」の力を重視している。内容を吟味し、普遍性のある深いテーマを選ぶことが重要で、深いテーマを選ぶことができれば、その内容の深さが学習者を動かし、そこにおのずと当事者性が生じると考えている。

(2) 「内容理解」と「発表」

本授業では、教材として報道番組のビデオを使用している。学習者の世界知識の拡大という目標の達成に際して、この柱となるのが「内容理解」（よりレセプティブな活動）と「発表」（よりプロダクティブな活動）である。

「内容理解」としては、語彙の導入、背景知識の呼び出し・拡大、ノート・テイキング、内容理解の質問に答えるなどの活動を行なっている。「発表」としては、グループ・ディスカッション、ディスカッションの結果の発表、意見文作成・推敲などを行なっている。

これらの「内容理解」「発表」の活動を通して、学習者は事象を正しく把握し構造化することができ、また、活動を繰り返し行なうことで、日本語力およびアカデミック・スキルの向上を図る。このような日本語力・スキルの向上は、事象のさらなる正確な理解を実現し、それにより問題の発見、考察、そして当事者性をもつ、「自発」へつながっていくと考える。

(3) 普遍性の高い内容をとりあげる／世界を捉える2つの観点

上に述べたように本授業では「内容」の力を重視している。その内容選択にあたっては、世界を2つの観点から捉えた。その世界を捉える2つの観点とは次のようである。

- 1) 自然界とヒトとの境界領域で起きている問題
- 2) ヒトの社会における問題

この観点のそれぞれから、より普遍性の高い問題を扱った番組を教材とした。現在、世界でとりあげるべき問題は多くあるが、国や民族、立場を超え、より多くの人、事象に関連性のある問題として、ヒトが増えすぎたために起きている諸問題と、世界を覆いつくす市場原理主義をテーマとしてとりあげた。実際に使用した教材のタイトルと内容の骨子は以下のようである。

- 1) のカテゴリーに該当する問題として
 - ・「人口増加」NHK 総合ニュース 特集
人口増加による環境破壊、エネルギー不足、食糧不足、国際社会の対策
- 2) のカテゴリーに該当する問題として
 - ・「密着ヒルズ族 ～“勝ち組の塔”で何が行われているのか～」NHK 総合 特報首都圏
市場原理主義による富の格差、階級化、その対策と課題
 - ・「故郷^{ふるさと}が消えていく ～相次ぐ集落崩壊～」NHK 総合 クローズアップ現代
市場原理主義による地方と都市の格差、二つに分裂した社会、地方と都市を結びつける新しい連帯経済のあり方

教師は適切な素材を選び、事象を正しく捉え、かつ、日本語力およびアカデミック・スキルの向上のための装置（教材・活動）を組み立て、学習者に学びの機会を提供するが、学習者の世界知識の拡大がより効果的になされるためには、装置（教材・活動）の提供だけでなく、教師自身の持つ世界知識の幅が重要な鍵となる。教師の世界知識が、深く構造化されたものであれば、広い視点から事象を捉え、さらなる問題の発見、深い考察へのきっかけを学習者に与えることが可能となる。このため、教師には学習者以上に自身の世界知識の拡大に意識的・積極的に取り組む姿勢と、絶え間ない努力による成長が求められる。また、一連の活動における学習者と教師のインタラクションを通して、双方が共に成長していくことも可能となろう。

以上のように、本授業では、総合的なアカデミック・スキルの向上とともに、世界知識の拡大を目標の大きな柱に据え、それにより、問題について世界について当事者性を持つという学習者の「自発」を促すことができると考えている。

5. おわりに

以上、1, 2年次学部留学生対象の日本語日本事情5科目について、「自発」を促すという観点から記述、分析を行なった。この結果、自己モニター、他者とつながる、書くことや「内容」理解によって思考を深め世界を広げるなどのことが、学習を成立させるための前提にあることが分かった。受動的になりがちな学習者の現実を見る時、従来はあまり論じられてこなかった、こうした学習者の「自発」という土台の構築が極めて重要な役割を果たすことが明らかとなった。このことは、今後、アカデミック・ジャパニーズのあり方を考える上で、一定の示唆を与えることになるだろう。

注

- (1) 「アカデミック・ジャパニーズ」の定義については参考文献(3)(5)参照。
- (2) 「文章全体の論理展開と関連づける」ことについては参考文献(1)参照。

参考文献

- (1) 井上優・宇佐美洋編(2004)『論理的文章作成能力の育成に向けて』（日本語教育ブックレット5）国立国語研究所
- (2) 沖田弓子(2009)「世界知識の拡大を目標とした『日本語聴解』授業の報告」『日本語教育論集』第24号、筑波大学留学生センター、115-131
- (3) 門倉正美・三宅和子・筒井洋一編(2006)『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』ひつじ書房
- (4) 杉浦千里(印刷中)「学生の『自発』を引き出す授業の『仕掛け』-『日本語演習 I』の授業報告-」『日本語教育論集』第25号、筑波大学留学生センター
- (5) 東京外国語大学留学生日本語教育センター編(2005)『アカデミック・ジャパニーズを考える【2004年11月6日開催】報告書』東京外国語大学留学生日本語教育センター
- (6) 柳田直美(印刷中)「キャリアデザインの視点を取り入れた授業活動 -『日本語演習 II』の実践報告-」『日本語教育論集』第25号、筑波大学留学生センター
- (7) 吉崎静夫(2008)『活用型学力が育つ授業デザイン』ぎょうせい

表1 日本語科目の授業目標・活動のポイント

科目名	日本語演習Ⅰ	日本語演習Ⅱ	日本語作文	日本語読解	日本語聴解
担当者	杉浦千里	柳田直美	木戸光子	西村よしみ	沖田弓子／関裕子
キーワード	自己観察／異文化理解／聞いてもらえる発表／討論を深める／自発的に動く	アカデミック・コミュニケーション・スキル／自己観察と他者観察／他者への意識／自ら世界を広げる	「書く＝考える」／「書き換える」言語技術／事実中心・意見中心のレポート／グループでの推敲／未来志向の内容	思考力／自己モニタリング／モデリング／共同学習／学習プロセス重視	「内容」重視／世界知識／「構造化された」知識／取り上げるべき「内容」・世界を捉える2つの観点／当事者性
目標	1) 異文化理解をテーマとした日本語学習を通して、自分自身を知る 2) 日本語で自分を表現する手段を知る 3) 発表と討論を行なう	アカデミック・コミュニケーション・スキルの実践を通して、自己と他者を観察し、他者をひきつける話し方とは何かを考える。	レポート作成のための言語技術の育成を通して、視野を広げ、思考力を高める。	学習プロセスを重視し、 1) 情報を読み解く：情報を正確に理解し、要約する 2) 理解・推論：情報の意味を理解し、筆者の考えをつかむ 3) 熟考・評価：知識や経験と結びつけ、意見を述べる	総合的アカデミック・スキルの向上とともに、世界を正確に読み解き、世界を変える行動につながる『構造化された』知識＝教養を身につける。
主な活動	1) 異文化理解についての文献購読 2) グループ・ディスカッション 3) グループ発表と討論 4) 発表と討論についての検討会 5) 毎回「振り返り」を書き、自分の状態を知る	1) 審査員を意識し、論理的に意見を述べる討論会 2) 自らの興味関心を明らかにし、聴衆に訴える調査発表 3) 他分野の学生を意識した専門に関する個人発表	1) 理解した内容の再構築、構成・表現を「書き換える」 2) 表現・内容・思考を深化させるためにグループで推敲をする(期末レポート「10年後の自分に必要な仕事のスキルは何か」に向けて)	「若者→自分自身」がテーマの素材を使用。 1) 語彙の理解、運用力 2) 音読と黙読 3) 内容理解 4) 要約 5) ディスカッション 6) 意見文作成	報道番組のビデオを教材とする。 1) 語彙、概念の導入 2) 背景知識の呼び出し 3) ノート・テイク 正確な聴き取りと理解 4) ディスカッションと発表 5) 論説文作成と推敲
「自発」を促す要素	自己モニター力 1) 自己観察(初回、毎回の終了時、最終レポート)を書き、自分について考える 2) 討論の「観察者」を設定する 3) 授業外でのタスク(宿題)を通じて、授業の内容と自分の現実とを結びつける	他者とのコミュニケーション力 1) テキストは基本的に用いず、学生が自ら知りたいと感じ、集め、まとめたものを授業で話し合う材料とする 2) 発表者・聴衆・観察者の役割を分担し、自己と他者の観察を通してプレゼンテーションにおける他者への意識を促す	言語技術 「引用する」「簡潔にまとめる」「事実を書く」「意見を書く」「全体構成を整える」について、作文を書く過程でグループ学習により気づきを促す。	思考力 情報を読み解き、知識や経験と結びつけ、意見を述べることと、自己モニタリング、モデリング、共同学習を通して、思考力を育成する。	内容・知識 世界を捉える2つの観点から内容を選択。 ①自然界とヒトとの関係(ex. 人口増加による環境破壊) ②ヒト社会を動かす原理(ex. 市場主義) についてより深い知識を得、それにより世界の中の「わたくし」の当事者性を確立する。